
ノーマルパーソン

千春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーマルパーソン

【Nコード】

N8138T

【作者名】

千春

【あらすじ】

ただの少年が異世界に飛ばされてイロイロしちゃうお話です。チートでも最強でもありません。ちょっと特殊な能力をオマケ程度にもった少年の物語です。ほのぼのとした気軽な物語になる予定。
(8/19文章の書き方を全ての話にて変更、内容に変更点は無し)

ある日森の中少女にであつた？（前書き）

誤字等がございましたら気楽にご連絡下さい。早急に直させていただきます。

ある日森の中少女にであつた？

青い空、そして青い海が眼下に広がる。

海から吹いてくる風が船の上から海を眺める藤村　武の髪を揺らしす。

「おおー、これぞ沖縄！　って感じたな！」

「なんだそりゃ」

今までに見たことの無い光景に武が思わず簡単な言葉を漏らすと、近くで聞こえたらしいクラスメイトが笑いながらツツコミを入れてくる。

今は10月、すでに本州では秋の到来を感じられるようになって、いるが沖縄では未だに夏のように太陽が武たちの事を照り付けている。

10月でこれならばなう真っ盛りならばどんな地獄が繰り広げられるのか気にはなるが、試したいとは思わない。

修学旅行も折り返して三日目、クラスの友人達は疲れるどころかますますテンションを上げている。

今日は事前に分けられたグループ毎に違うものを体験できるというもの。

スキューバ体験、地元料理試食、水族館などなど様々なイベントが目白押しだ。

その数あるイベントの中で武が選択したのは中でもっとも参加者が少なく、過酷で、武の仲の良い友人が一人たりとも参加しなかったものだ。

「着いた」

沖縄本島から30分ほど船に乗って到着したのはとある小さな島。その島の中を自転車で探索すると言う何の生産性も無いものである！

渡されるのは簡単な島の地図と水、そしてレンタルバイク。

武は自転車に跨り島の中央にある山を見詰める。

「この島は急な坂が多く、自転車でのサイクリングには絶対に向かない」

この場所に集まったのは20名程度、この中でリタイアする事無くあの山の頂上に立つことの出来る者は実際には半分程度。その数少ない達成者には島を一望できる絶景がプレゼントされる。

だが武はそんなものには欠片も興味は無かった。

彼の目的は別のところにある。

彼がその情報を見つけたのはたまたまだった。

事前に沖縄について調べようと言うHRの時間を無理矢理消費しようとしたとしか考えられない授業中、武はある新聞の小さな記事を見付けた。

その新聞の年は平成、本当に最近の記事だった。

「神隠し？」

内容は「現代に蘇った神隠しの祠」という見出しで始まり、その島に伝わる伝承と共に載せられていた。

某日、地元に住んでいる仲の良い男女の三人組は島に言い伝えられている伝説の謎を解こうとその祠に向かったのだそうだ。

祠に付いた時、三人組の中の女の体が突如として光出し、驚いた男二人はとつさに目を瞑った。

光が収まり、二人が目を開いた時には女の姿は無かったのだと言う。

最初、男二人がなんらかの理由で女を殺したのではないか、事故を隠そうとしているのではないかなどと疑われていたが証拠が出てくる事は無く、女も未だに見付かっていない。

武はこの記事を見た時に自分もその現場を見たいと思ってしまった。

そこで武はその時はまだ決めかねていた三日目の参加イベントを離島探索に決定したのだった。

武はこれを一人で体験したいがために、全員が決定して変更が出来なくなった頃に友人にこの事を話し、自慢げに三日目にはそこを見に行く事を語ると友人達は苦笑しながら声援を送った。

武が突然何かを思いつき、積極的に行動する事は日常的な事になっているのだ。

ある日森の中少女にであつた？

山を上る途中にある休憩所兼お土産やのような所で武は自転車を置くと、武は木でできたベンチに勢い良く座り込む。

予想以上に坂を自転車で駆け上るといふものが辛く、もう足がパンパンになってしまった。

普段からもう少し位は運動しておくんだつた自嘲気味に呟くとそのプルプルと若干震えている足を叩く。

「うわあ、汗でベトベトする」

武はここに代えのＴシャツを持ってこなかった事を大いに悔やんだ。

ここまでの移動だけで武は汗をかいてベトベトと素肌にシャツがくっつく感覚がする。きっと今シャツが絞れば滝のように汗が出てくるだろう。

ここでお土産屋に売っている「なんくるないさ」とか「海人」しまんぢゅとか「島人」しまんぢゅなどとかかれたシャツを買う手も考えたが、そう言ったものはお土産として買って帰って初めて着て嬉しい見て嬉しいものであつて、買った所で着てもなんら感慨などは生まれ無い。

むしろ空しい気分になつてしまう。

「はあ、そろそろ行くか」

ソロソロ祠に向かわなくては帰りの集合時間までに間に合わなくなつてしまふかもしれない。

武は震える足をパンパンと叩き気合を入れると休憩所の裏手にあるトイレへと向かう。

トイレには入らずにそのまま奥に進んで行くとそこには先ほどま

でのキッチンと整備された道では無く、雑草が生い茂り、少し注意して見なければ気が付かないような獣道が出てくる。

事前に調べた所、この島にはハブは出ないらしい。

しかしそれがどれだけ正確だかわからないし、もしかしたら注意すべき生き物を見逃しているかもしれない。

武は一回息を呑むと「ふう」と息を吐いてその獣道に一步踏み込んだ。

最初の一步さえ出してしまえば後はそのまま進んでいくだけだ。注意して見ていれば道も見失わない。

ザクザクと若干生えている倉を踏みつけながら道を進んでいく。

日はまだ高いが辺りに生えている木々が太陽の光を遮り、少しほの暗い雰囲気醸し出している。

しかしそのお陰でその太陽光の暑さがなくなり、草木の生み出す新鮮な綺麗な空気がヒンヤリと武の身体を少しづつ冷ましていった。風が吹くたびに木々が揺れて木の葉が触れ合い音が鳴り、鳥が遠くのほうで鳴いているのが聞こえてくる。

本州のそれなりに開発の進んだ地域に住んでいた武にとってはこれは感動をもたらした。

武は思わず歩く事を止めてあたりを見渡し、その荘厳な命を感じた。

「え？」

武が森の雰囲気を楽しんでいるとその視界の端に何かが映り込んだ。

慌ててそちらを見るとそこには一人の少女が白いワンピース姿で立っていた。

ある日森の中少女に出会った？

やばい、これは地元の人に見付かったかと焦り辺りを急いで見渡すが誰も見当たらない。

大人がいない事にほっとしたが何故この少女は一人でここにいるのだろうか疑問が増えた。

少女は大体10歳前半のように見える、誰かに連絡をとっているように見えないし、近くに親や付き添いと思われる人間もいない。

こんな山の中腹付近にある森の中にこんな少女が一人でひっそりとたっているのが不思議でならない。

「どうかしたのかい？ お母さんとはぐれちゃった？」

「お兄さん、探しもの？」

「え？ あ、ああ。そう、だけど」

「それは人？ それとも物？ もしかして門？」

「え？ ああ、その」

「お兄さんの探し物はきつとあつちよ」

朗々と手で節を作りながら語る少女。

その慌しく動く手とは別に顔の表情は全くと言って良いほど動かない。

そのせわしなく動かしていた腕をピタリと止めて少女は一方向を指差した。

先ほどの会話が成立しているようでしていない、こちらの考えている事がまるで全て分かっているかのような会話に少し怖くなった武はその指差された方向に迷わず進む。

何故かこの時はその気味の悪い少女の言葉に肅々と従ってしまった。

武にとってもこれは無意識のうちの行動で、これには何の疑問も

はさむ事は無かった。

そしてそのまま気味悪がって振り返る事無く歩いて行ってしまったことで武は気が付かなかった。

少女が可憐な微笑を浮かべながら「いつてらっしゃい。素敵な出会いがありますように」と呟いた事に。

「あつた」

少女に言われた通りに進んで行くと武は少し開けた場所に出た。

そこはまるで人の手が入っているかのように祠を中心に半径2mの間は気が無く、雑草も一定の長さ以上に育つ事無く生えていた。

まるでそこは何か神聖な儀式を行つための舞台のようにそこだけが周囲の空間から逸脱していた。

二つの岩が『人』と言う文字のように重なり合い、その隙間に何も置いていない台座だけがあつた。

どこの神社よりも質素で、優美さの欠片も感じられない作りであつたが何故か武はその祠に見入つた。

神像が置いてなく、何の神を祭っているかなど分からないがなんとなくこれはこの山を、森を支配してるのではないかと感じた。

武はイソイソと荷物の中からカップ酒を取り出すとそれを台座の手前に置き手を合わせる。

こういつたところの礼儀などは知らないが取り合えずこうしてお酒を供えておけば大丈夫だろうと考えた。

「お酒は余り好きじゃない」

「え？」

あの気味の悪い少女の声が聞こえてくる。

振り返るがそこには誰もおらず先ほどまでと変わらずただ壮大な森が広がっているだけだ。

「まあ今回は許してあげるとして、次回はもっと私のことを考えたものにしてね？」

「な、なにを……」

「さあ、呼ばれています。良き生を歩まん事を。あとお供えのお返しにぶれぜんとぶおーゆー」

その言葉が聞こえた瞬間、全ての音が掻き消え全てが光に染まった。

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？

絶体絶命とはまさに今この時のためにあるようなものだろう。

ジュリア「マクベルンは自身の迂闊さと見通しの悪さと実力不足を嘆いた。

自他共に認める天才である事は紛れもない事実ではあるが、流石にできる事とできない事というのは存在するのだ。

そして今回がたまたまできないことだったというだけのこと。

今回の自分の敗因は朝食を抜いてしまった事だろう。

最近は何に向かって新しい魔法技術の開発に闘志を燃やしていただけの事はあつて技術面での成長は然ることながら、それを上回る勢いでの体重面での成長が著しい。

まあそういう事でジュリアは朝食を抜いたせいで空腹状態だったのだ。

その時、人間には空腹であることを外部の人に伝えると言う便利なんだか迷惑なんだか分からない機能がっている。

その機能は人は制御することが不可能でどんな時でも自身の置かれている状況など関係無しにそれは発動するのだ。

つまりジュリアは目標がこちらに気が付いていない間に倒すつもりでいたのだが、静かな空間でそのお腹に飼っている虫が大きな声でシャウトしたと言うだけの事なのだ。

そして目標は見事にその音に気が付き、その音のした方向まで特定した。

ここでさらなる不幸が重なる。

彼女が倒そうとしていた目標というのが、地上の食物連鎖の頂点に君臨し、人間一人では到底倒せるはずの無いものであった。

爬虫類のような硬い鱗で覆われ、その翼で空を飛び、口から高温の炎を吐くと言う怪物。

数々の伝説で語られ、幾多の英雄を踏みにじり、そして幾度と無

く討伐されてきた人間のライバル、ドラゴンである。

「ど、どうしよう」

ジュリアは小さな自身の身体を生かして岩陰に隠れる。

しかしその時に魔法を使うのに必要となる杖が自分の手から離れてしまった。

これでは魔法を使って反撃をすることが出来ない。

通常ドラゴンは高い山の中腹辺りに穴を掘りそこに巣を作る。

基本的にドラゴンの巢の入り口は一つしか存在しないのだが、その入り口からただ逃げ出しただけではすぐに追いつかれてしまう。

「ほ、本当にどうしよう」

唯一救いなのはこのドラゴンがある程度の知能を持っていたことだろう。

とある文献によるとドラゴンは一定以上の年月を生き抜くと知恵を付け始め、その知能は時として人間すら上回ると書かれている。

今岩の向こう側でジュリアのいる所を睨んでいるドラゴンはある程度知能があるようですぐに襲い掛かってくるようなことはせず様子見に徹している。

ドラゴンからしてみれば人間と言う弱小種族が最強の種族である自身に単身で挑むはずが無いと考えているのだ。そのせいで何か畏があるのではないだろうかと考えてしまい中々踏み込めないでいる。しかしこうやって時間を稼いでいられるのは時間の問題だろう。

ドラゴンが痺れを切らすか、こちらに友軍がいらないという事に気が付けばジュリアは命が無い。

「ああもう、どうしろって言うのよ……！」

着々と時間は進み、それにもなつてジュリアの顔色は段々と青くなつていく。

ドラゴンからこちらまで約10 m、杖までは1・5 m。
決断の時は迫っていた。

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？（後書き）

目指せ！毎日投稿！

〈解説〉

今回は各章が一話みたいな感じです。

投稿するのは一話を分割している、みたいな。

ですので文章量がかなり減っています。

こうすれば一日一話も夢じゃない！

というかこうしなければ作者がダラケルんですごめんなさいorz

きつと慣れてくれば文章量も自然と増えてくると思います。

どうぞこれからもよろしく願いします。

一日一話5000文字とか最強だね。

それ目指してみようかしら。

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？

ドラゴンは段々と焦れ始め、その鼻息が荒くなってくる。

本能が理性を上回り捕食者としてのプライドが畏への不安を飲み込んでいく。

「杖を取るのに1秒、そこから呪文を完成させるのに1秒、相手に狙いを定めるのに1秒。合計3秒必要になる」

対してドラゴンはこちらに向かっていつでも突撃できるように体勢を整えている。

もしここから一步でも外に出ればすぐにでもその巨体で突貫してくるだろう、そうなれば一貫の終わり。

考えると考えるだけ自分の絶体絶命さが明るみになり、ジュリアは顔を強張らせる。

「どうしろっていつのよこんなの！」

G y a o o o o o o o !

「え！？ 何！？」

しかし現実というのはこちらの状況などお構い無しに進行して行くもので、ドラゴンはとうとう自身を抑えきる事が出来なくなり、その巨体を存分に揺らしながらジュリアに向かって突撃を開始した。

「やばっ」

ジュリアはとっさに背中を丸めて身体を小さくするとその上をド

ラゴンは通り抜けていく。

壁にぶつかりドラゴンは一瞬ではあるがその動きを停止した。

「ラッキー！」

ジュリアは自分の杖に飛び掛り、それを手に持つ。

それを振りかぶり呪文を唱えるとそれを振り下ろし……

「あれ？ 発動しない？」

ジュリアが自身の杖を見てみると、何とその先っぽの部分が折れていて、魔法の発動体としての意味をなしていなかった。

そのジュリアの横を転がる先端部分に付いていた青い宝石。

とつさにそれに手を伸ばすがジュリアの視界に口に炎を溜めているドラゴンの姿が映る。

驚き固まる体。

一瞬にして喉は渴ききり、目は見開かれる。

ジュリアはその時悟った。

「あ、終わった」

思わずジュリアは呟く。

ドラゴンが口を開き、その炎を放とうとした。

「た、助け……！」

思わず口から出た言葉は一瞬たりとも信じた事の無い物に助けを請う言葉。

「助けて、神様」

しかし、その願いは叶えられた。

突如起こった閃光がドラゴンの巢を照らし出す。

その光の強さにドラゴンとジュリアは目を瞑る。

そしてジュリアが目を開けたとき、そこにはドラゴンの目に剣を突き刺して頭にぶら下がっている一人の少年であった。

何故かその時、ジュリアは自分は助かるのだと安堵した。

その少年がどんな人物なのか、どれほどの実力を持っているかなど知る由も無いのに、ジュリアはそこで自分は助かるのだと思ったのだ。

ジュリアは傍を転がっている発動体の本体である宝石を手に取り、ドラゴンに向けて呪文を唱える。

ドラゴンは何が起こったのか分からない様でブンブンと大きく何度も頭を振っている、頭に剣を突き刺した少年は必死になって捕まっているが、あの様子ではすぐにでも吹き飛ばされてしまうだろう。だが、今となってはそんな事はどうでも良い。

自分のプライドをここまでズタズタにしてくれた敵であるドラゴンに対してどのようなようにして溜まりに溜まったストレスをぶつける事の方が今のジュリアにとっては大事なのだ。

イメージするのは爆発。

周囲にある酸素という酸素を全てを食らい尽くすような大きな炎、全てを吹き飛ばす爆風、例えばドラゴンであろうとも骨まで焼き尽くす熱量。

自分の中で滾っている魔力を怒りに乗せて、今こそ解き放とう怒りの魔法。

「その男！ 死にたくなければ手を離しなさい！」

実際にはそんな言葉を発する時間すら惜しいのだが、助けてもらった身であるために最後の慈悲として声だけはかけてあげる。

初めてこちらに気が付いた様子の少年はジュリアを見ると顔を真っ青にして急ぎその手を離した。

振り回されていた勢いと合わさって地面に思いっきり叩きつけられるが少年はすぐに岩陰に身を隠す。

それもしようがない事だろう、彼の視線の先には少女がおり、その少女の掲げる右手の先には直径1mはあるつかという炎の球体が浮かんでいたのだから。

少年は魔法がある世界から来たわけではないがそれに対して激しい恐怖感を覚えた。

少年が岩陰に隠れた事を見届けるとジュリアはその杖を何の躊躇いもなく振り下ろす。

「ファイヤーボール
怒りの火球！」

先ほど起こった閃光に負けないほどの閃光を放ちながらその火球はその込められた魔力を熱に一気に変換し、巢の中を駆け巡った。

この時幸いだったのは、ドラゴンの巢というのが広く、頑丈であった事だろう。

その爆発が起こってもその巢はびくともしなかった。

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？

「ケホ、ゲホゲホ。ああ死ぬかと思ったあ」

思いっきり爆発させた火球により発生した爆煙により洞窟内の視界は0になった。
ファイアーボール

それが収まると見えてきたのは倒れているドラゴンの姿、どこか香ばしい匂いが漂ってくる。

今晚のメインディッシュはドラゴンステーキに決まりだ。

近付いていくとその巨大な身体が自身の視界に入りきらなくなってくる。

ジュリアは首に近付き、手持ちのナイフでその首を切り裂こうとした。

ガギ、ギギギ

「……あれ？」

ナイフを試してみる。

とそれはドラゴンの皮を切り裂くどころか、その刃はボロボロになり、もう使い物にならなくなっていた。

「うわ、硬いつて聞いてたけど、こんなに凄いんだ」

一応首都で仕入れた高品質のモノだったが、一回の使用でまさか使い物にならなくなってしまうとは。

ジュリアはこれ売った商人をどうやって苛めるかを考えながらそのナイフをドラゴンの目に突き刺す。

片目はもう潰れていたのもう片方の潰れていないほうを刺す。

そうすると一回ビクツと身体が動いたがそれ以上は何の反応も無かった。

引き抜くとニチャニチャと粘着質な音を出しながら目玉も一緒になって取れた。

「お、ラッキー。ドラゴンアイは希少なんだよね」

それをいそいそと用意していた液体の詰まったビンの中に入れる。もう一つも確かめてみたのだが、どうやらこちらは完全に潰れてしまっていて、さらに先ほどの爆発による熱が突き刺さったままの剣を通して伝わってしまったようで干からびていた。

見てみるとドラゴンの皮膚も所々焦げている。

元来炎を操るドラゴンの皮膚は火に対してかなりの防御力を誇るはずなので、それを焦がせるという事は。

「私ってばさっすがー！　って事ね」

その事に満足するとジュリアは大きな笑みを浮かべてドラゴンの目に付き刺さった剣に視線を移す。

そこにあったのは何の変化も見られない一本の剣。

ドラゴンを焼くような炎を受けてもビクともしない剣。

自分の本気をあざ笑うかのような光景にジュリアはその剣を手に取り。

「ん？」

抜けない。

「このっ」

ビクともしない。

「おりゃ！」

……

「どおりやあ！」

どんなに力を込めてもその剣は少しも動く事は無かった。

どれだけの力を込めればこの剣はここまで深々と突き刺さる事ができるのだろうか。

「な、生意気な剣ね。よし、やってやろうじゃないのよ！」

ジュリアは手を叩くとペツペツと唾をつけて手の平を擦り合わせて気合を入れると剣を引き抜きにかかる。

「グヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌ」

「うわぁ、全てが台無し」

「へ？ ってキヤア！？」

ジュリアは突然声をかけられたことに驚き思わずその手を剣から離してしまう。

バランスを失った身体は何も守られる事無く地面に倒れる。

地面に腰を打ち付けてしまいジュリアは思わず涙目になる。

話しかけ自分にこんな醜態を晒させた犯人を見るとそこには大体自分と同じくらいの黒髪の少年が立っていた。もちろん知っている人物ではない。

「誰よアンタ、どうしてこんなところにいるのよ」

「いや、それは俺としても聞きたい事なんだが」

驚きが連続しすぎて逆に冷静になってしまっている黒髪の少年、武は目の前の少女に視線を向ける。

おそらく道を歩いていれば十人が十人振り返るだろう綺麗な金髪。顔も可愛い部類に入るだろう。

総合的に評価して言えば、こんな子に優しく声をかけてもらえば恐らく簡単に惚れてしまうだろうと武が考えるほどだった。

外見年齢的には同じくらい、17歳程度だろうか？

「はあ？ 意味わかんないこと言ってんじゃないわよ。さつさとどっか行きなさいよ」

残念ながらかけられた言葉は優しさとはかけ離れたとても冷たいものだっただが。

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？

「それでアンタはいつの間にかここに居たという事？」

「おう」

とりあえず落ち着いて話し合う事にする。

武の身の上話をするとジュリアは案外真面目に聞いてくれた。

「んー、よく分からないわね。そういった現象があつた事は余り聞かないけど」

「まじか」

「ニホンって国も聞いた事無いし、チュウゴク、アメリカつてのも分からない。でも言葉は通じるし、どうなってるの？」

「分からないから聞いてるんだよ」

武の話に出てくる情報にジュリアは全く聞き覚えは無かった。

だが武としてはそれは当然の事であると考える。先ほどイキナリ目の前に現れたドラゴン、こんな生き物は自分の生きていた世界には存在していなかった、それから先ほどの少女の大きな炎、聞いてみるとそれは魔法だという。

魔法を知らないというとジュリアは不思議なものを見るような目を向けてきた、という事はこの世界では魔法というのは万人が知っている、あつて当然の技術なのだろう。

少なくとも武がいた世界のように『ありえないもの』として認識されていないようである。

「それじゃあしょうないわね、ちよつとの間私の旅に付き合いなさい」

「へ？」

「何よ、このままここで野垂れ死にたいの？ 変な奴ね」

「いや、そうじゃないけどなんで？」

はつきり言つて今の自分はかなり怪しい存在だと武は考えていた。意味の分からない情報を垂れ流して、自分がどうしてここにいるのかを理解していないという。

はつきり言つてかなり怪しい人物だ。

自分ならば絶対に近くに置いておきたくない。

「怪しいだろ？」

「本当に危険な人物は自分からそんなことは言わないわよ」

確かかに「自分は不審人物っす」といつて歩いている人物はいないが、そんな事は今は問題じゃないだろう。

「それに一応私は貴方に助けられてるのよ、貴方にそんな気が一切無かったとしてもね」

そう言つとジュリアは立ち上がるとすでに冷たくなり硬直を始めたドラゴンの死体に近付く。

そのザラザラした皮を一回撫でると振り返り、武に指を突きつける。

「働かざるもの食うべからず！ という事でコイツを解体するの手伝いなさい。鱗がない腹部なら少しは簡単だろうし」

「解体つて……」

そんな経験の無い武にとってみればやれと言われて、すぐに「わかりました」と出来るものではないのだが、と考えているとジュリアから早くしろと注意を受けた。

しょうがないので武は死体に近付く。

「解体って何か道具は無いのか？」

「そこにアンタの剣があるじゃない、それ使いなさいよ」

「剣？」

「何よ、使いたくないの？でもそれしかないんだから匂いくらい我慢しなさいよ」

しかし剣と言われても武には剣を持つなどという趣味なんて無い。むしろ、そういった凶器を持っていれば捕まるような世界から来たのだから持っているはずが無い。

辺りを見渡してみるとドラゴンの目に突き刺さっている一本の剣が見えた、これがジュリアの言っている武の剣だというのだろうか。そういえばと思い出す、たしかこつちに来る前に聞こえた声がこう言っていた。

『さあ、呼ばれています。良き生を歩まん事を。あとお供えのお返しにぶれぜんとぶおーゆー』

呼ばれた？ それはジュリアが助けを呼んだので手近にいた俺をこの世界に送ったと言う事だろうか？

きつとお供えのお返しというのはこの剣の事だろう。

武はドラゴンの目に刺さっている剣の柄を両手で持つとそれを引き抜く。

少し抵抗があつたがそれ程苦勞する事無く引き抜くことができた。

「うわ、アンタって見かけによらず力持ちなのね」

「え？」

そう言えば最初に話しかけたとき、ジュリアはこれを抜こうと必

死になっていた。

自分はそれ程力を使わずにこの剣を引き抜いたのだ、もしかしてさらにオマケでこの剣を簡単に扱えるほどの筋力がプレゼントされたとかそういう事ではなからうか。

武はそれに気が付くと早速近くにあった岩に近寄り、その岩を持ち上げようとしてみる。

剣から手を離すとそれは軽く落としたけなのにズズンと重い音をたてた。

岩の下に手をやりグツと力を込める、しかしそれでも岩はビクともしない。

どうした事だろう。

筋力が上昇したというわけではないのだろうか。

「タケル！ さっさとこつちを手伝いなさいよ！」

「あ、ああ」

良く分からないがとりあえず剣を持つ。

やはりこの剣は殆ど重さを感じさせないほどだ、どういう事だろう。

死体に近付き、剣を振り上げ、それをドラゴンに向かって振り下ろす。

一昔前に剣道をやっていた武にとってみれば、取り敢えずはこの剣を振るう事くらいならはできる。

どう考えてもこの剣の重さはそこに置いてあった木刀よりも少し重いくらいにしか感じられない、ならば武が扱えないわけが無かった。

その振り下ろされた剣はドラゴンの皮を簡単に叩ききり、そして地面に30cmほど埋まって止まった。

先ほどからジュリアが硬い硬いと言っていたので武は手加減する事無く、地面に当たらないようになどと考える事なく振るったため

に剣の切っ先が地面に深々と埋まってしまったのだ。

「あ、あれ？」

「いや、本当にどれだけ馬鹿力なのよ」

それは武だつて知りたいのだった。

剣を見たまま固まる武。

「これ、どうなってるの？」

「え？ あ、ちよつと剣を見せてみなさい」

そうジュリアに言われ、武は素直に剣を見せる。

持たせる事はできないので地面に置く。

「ん〜、これは魔術刻印がされてるわね」

「魔術刻印？」

魔術刻印というのは、魔刻^{マーク}と呼ばれる技術で、その物体に何らかの魔術的な効果を与えるといったもの、それを専門にする技師を魔^{マジ}刻師^{イカー}という。

重さを軽くしたり硬くしたりなど便利な効果が多いのだが、それをするには卓越した魔力のコントロールと手先の器用さを必要とし、それを一つ刻むだけで1ヶ月を要する為に高値で取引される。

「持ち主限定重量軽減、呼び出し、切れ味強化。何これ、こんなもの売ったら庭付きの一戸建てが買えるわよ。しかも元々の物もかなりの物だし」

刻印は一つを刻むとそれを阻害してしまう為にそれ以上重ねる事は難しい、しかしこの剣はそれを嘲笑うかのように三つも刻まれて

いる。

まさに神が直接手を出したとしか考えられないような一品であった。

剣士ならば一度は振るってみたいと思い、魔刻師ならば見本としてなんとしても手元に置いておきたいだろう。

「これ貰って良い？」

「勘弁してくれ」

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？（オマケ）

無事にドラゴンの解体を終えて武とジュリアは一息ついた。

巢の中で火を起こし、そこに転がっていた大き目の石を表面を平らにして置き、切り取ったドラゴンの肉をそこに乗せて焼くという原始的な方法で料理をする。

一応ジュリアが調味料や水を持っていたので簡単に味付けをする
とそれが焼けるまでの間二人は火を囲んで話をしていた。

「ジュリアはなんでこんなところに居たんだ？」

「ん？」

ドラゴンと言うのはとても強い魔物だと言う事はジュリアから聞いていた。

しかしそのドラゴンを相手になぜジュリアはたった一人で立ち向かったのか。

「約束、かな」

「約束？」

「そっ」

そう言った時のジュリアの顔は、とても優しく、しかし悲しそうな笑顔だった。

まだ会って間もない自分では深くは聞けなくなるような笑みを浮かべてジュリアは火をジッと見詰める。

武も火を見る。

パチパチと枝が弾ける音が空気を揺らす。

「それと、夢」

それはドラゴンに一人で立ち向かうと言う命が幾つ有っても足りないような無茶をしても叶えなければならぬ約束なのか、夢なのか。

それは決して生半可なモノではないのだろう、簡単に聞いてはならないのだろう。

「騎士団って知ってる？ ジルヴァート王国騎士団」

無論別世界から来て、まだ間もない武にとってみれば全然聞いたことの無い名前だった。

「私の夢はそこに入団して……」

夢見る少女のとてもキラキラした顔でジュリアは言った。

「リア様と少しでもお近付きになりたいの！」

「は？」

とても感動的な場面だったはずなのに発せられた内容は俗物的で、個人の欲望にまみれたものだった。

「ああ見ていてくださいリア様！私が第二の女騎士として貴方を支えます！もちろん支えると言うのはあ、そのお、政務の方もそうですがあ、そのう、あのう……夜の相手とかも入る、かも……やあん！もうやあんたらやあん！ああ！リア様そんな！私にも心の準備というものがあああん！」

空気はぶち壊され、ついでに武の中にあつた優しくて綺麗だったジュリアもぶち壊れた。

そのクネクネと身体を揺らしながら恍惚とした笑みを浮かべているジュリアを見て武は思わず項垂れた。

その落ち込んだ様子に気が付いたのかジュリアが心配そうに話しかける。

「どうしたの？ もしかしてさっきまでの私の言葉を聞いて私とリア様の絡みを妄想してしまったの？ ああならしょうがないわね、だったら貴方のアレが収まるまで待つてあげるわ」

「うるせえ！」

この少女、どうやら一回スイッチが入ると下ネタが止まらなくなるようだ。

ジュリアの外見は素晴らしいと言えるだろう（内面はアレだが）。透き通るような白い肌、流れるような金色の髪、パツチリとした大きな目、微笑を浮かべる唇、どれをとっても全てが一級品。

「否定しないって事はそうなんだ？ ほら、洞窟の外に走れー！」
「ちがうつつうの！」

ただし中身はこれだが。

残念で仕方ないがこれだ。

武の中の幻想が確実に壊されていく。

ある意味男に理解のある女性である事には間違いないだろう。

これからの異世界生活、一体どうなってしまうのか。

武はそのことが心配でならなくなった。

出会いは突然に……ただしヒロインは変態？（オマケ）（後書き）

本日二回目投稿。

どうしてこうなったかは活動報告参照。

頑張れ俺、明日の分の書き溜めが無くなった。
皆、俺に元気を分けてくれ！。

ミノタウロスの丸焼き一人前？

ドラゴンの巢を出発し、山を下って半日も行くと村を見つけた。ジュリアはここで一泊した後準備を整えて巢に向かったらしい。ここで朝食を一食抜いた事があの緊急の場面を作ったらしいが、もしかして自分は朝食を一食抜いたせいで異世界から召喚されたのだろうか？

そう考えると武は少しだけ自分の価値というモノをなんだか軽く感じられた。

「サリの村。特産物は特に無いけど雰囲気の良い村よ。宿は無いけど村長に掛け合って一泊だけさせてもらったの」

「じゃあ今回も？」

「その予定よ」

村に入るとジュリアは迷わずに一軒の家の中に入っていく。

周りの家と比べると一回りとは言わないが少し大きな家だ。

「こんにちわー」

ジュリアが玄関先で声をかけると中から一人の初老の男が出てきた。

その男はジュリアを見て微笑む。

「おお、よく戻って来なされた。どうでした、ドラゴンを諦めましたかな」

「何言ってるのよ、もちろん倒してきたわ」

「またご冗談を」

「冗談じゃないわよ。私は騎士団に入ると言う夢を叶える為にこう

して功績を作りにきたのよ？ 手ぶらじゃ帰れないわ」

「そうですか、そうですか」

「……全く信じて無いわね」

「そんな事はございませんよ」

そんな和やかに会話をしながら二人は村長の家の中に入っていく。案内されたのは奥にある一室、そこにはベットが一つだけ置かれていた。

「申し訳ない、まさかお連れ様がいるとは思っていなかったのでもベットが一つしかないのです」

申し訳なさそうな村長の声に武は大丈夫ですと答え、ベットに潜り込もうとしたところだ。

「アンタは床よ」

という無慈悲な言葉と共に武はベットから突き落とされ、床を転がった。

予想通りと言えば予想通りなのだが、なんとなく納得がいかない。自分だって山を下ってきて疲れているのだ、ベットで寝たい。

しかし立ち上がりベットに近付こうとするとジュリアに冷たい目で睨まれたのですぐすこ床に座り、背を壁に預けて寝る事にした。冷たく硬い床の感触を感じながら武は目を閉じる。

「……！」

「……！」

外から人の声が聞こえてくる。

それは結構な大きさのようで、締め切られた部屋の中にいる武の下にまで届いた。

その騒がしさに顔を顰めながら目を開けると、そこは自分の部屋ではなく、知らない木造の部屋だった。

「ああ、そうか」

自分はいつの間にか異世界に来ていたのだ。

昨日は余りの出来事の連続で逆に冷静になっていたし、冷静にならなければ山の中で野宿にでもなっていただろう。

一晩たった今でもこの状況は変化していない。

やはりこれは夢ではなく現実なのだろうか。

いや、実際に昨日はモノの重さを感じていたし、ドラゴンに振り回された時には風だつて感じた、落ちた時には痛みだつて。

「……！」

「……！」

外での言い争いは今でも続いているようで武の耳を揺らした。

ベットの上を見てみるとそこには外の喧騒などお構い無しに枕にしている自分の腕によだれをたらしながらだらしなく寝ているジュリアの姿があった。

「うへ、うへへへへ」

どうやら今の彼女には関わらないほうが良い様なので武は固まってしまった自分の筋肉を和らげていく。首筋は特に念入りに。

「水でも貰ってくるか」

目を覚ます為に水でも貰って、そのついでに外の喧騒が何なのか見てこようと武は静かに部屋から出て行った。

ミノタウロスの丸焼き一人前？（後書き）

昨日は本当にすみませんでした！

ミノタウロスの丸焼き一人前？

村長の家の中をうろろろしてみるとそこには誰もいなかった。

しょうがないので外に出て様子を見る事にした武は玄関のドアを開く。

「マリアじゃなきゃダメなのか！？」

ボタンとドアを閉じる。

男の声で聞こえてきた女性の名前、恐らく色恋沙汰なのだろう。

武は面倒になったのでドアを閉じるとそのまま自分の部屋に戻る。

「アンタ、それは酷いでしょ」

しかしジュリアに回り込まれてしまっていた。

さきほどまで部屋で熟睡していたはずなのに何故。

「フフン、この私に不可能なんてものは存在しないのよ。さ、理由だけでも聞きに行きましょう」

何故か上機嫌でテンションの高いジュリアは武を押して外へ出る。外に出ると村の中央に存在する広場で一人の青年が声を荒げていた。

「お願いします！ どうかかならないんですか！」

「これはもうどうしようもないんだよ。私たちには冒険者達に依頼するお金は無いのだ」

その青年に歩み寄って諭しているのは昨晚泊めてくれた村長だっ

た。

落ち込み涙を流している青年を慰めている。

「何があつたのかしら」

「さつきはマリアがどうこうって言つてたからきつとそれ絡みじゃないかな」

ジュリアは「ふーん」と言うと村長の方に近付いていく。

村長もこちらに気が付いたようで振り返ると笑顔で挨拶をしてきた。

「どうかしたの？　なんだか騒がしかったんだけど」

「申し訳ありません、起こしてしまいましたか」

「いえ、そんな事はどうでも良いの。どうかなさつたの？」

「ええ、実は……」

この世界にはミノタウロスと言う魔物が存在しているらしい。

ミノタウロスは一般人では歯が立たず、熟練の戦士でも一対一では勝ち目が薄いという。

そのミノタウロスは極稀に知能を持ち生まれてくるらしく、村の近くに住み着いてその村から貢物を要求するのだと言う。

貢物には女性を要求する事が多い。

これはミノタウロスには通常雄しか生まれる事がなく、人間の女性とじゃなければ子孫を残せない。

そのため体の構造は殆ど同じ、ただし二周りほど大きくなり、異常なほど筋肉が発達している為硬い。

今回はそのような少し知能を持った個体が村の近くの森に住み着き、人間の若い女と食料と酒を要求してきたのだとか。

「なるほどね」

ジュリアはそれを聞き終わると一つ頷く。

その顔色が優れないところを見るとミノタウロスを相手にするのは拙いのだろう。

こつちには役に立たない剣士（武）と魔術師^{ジュリア}、そしてあとはただの村人しかない。

これだけの戦力でミノタウロスを相手にするのは難しいのは先ほどの話から推測すると簡単に理解できた。

「あ、あんたそう言えば冒険者なんだよな？ 頼む、どうかしてマリアを、マリアを助けてくれ！」

「無理ね」

青年がジュリアの肩を掴み迫ってくるが、ジュリアはそれを首を振り無慈悲にもその頼みを退ける。

それでもなおも青年はジュリアに頼み込む、このまま放っておけば土下座をする事も厭わないだろう。

「そこをなんとか！」

「無理よ、そんなに簡単に勝てる相手じゃない」

「報酬なら……報酬なら俺の持つてる金を全部渡したって良い！」

「そついう問題じゃないんだって……」

青年の手を振り払い、ジュリアは頭を掻くと一つため息をつく。

どうしたものかと悩んでいるとジュリアの視界の中に一人の少女が入り込んでくる。

青ざめた顔で涙目になりながら震えている一人の少女が小綺麗な服装で椅子に座っている姿が。

「あそこに居るのは？」

「マリアだ。俺のたった一人の家族で妹だよ」

その言葉を聞くとジュリアは顔を顰め空を見上げた。

その視線を追って武も空を見る、そこに広がって居るのはあの沖縄で船の上から見たのと同じ空だった。

世界が違っていても空は同じなんだな、と場違いな事を考える。

どんな苦勞をこれからしていくのかは分からないが、

「ちょっと全員耳貸しなさい」

ちよつと位の無茶ならやってみよう。

ミノタウロスの丸焼き一人前？

深緑が生い茂る森の中、その少し拓けた場所に小奇麗な格好をした少女が一人、ベールを被って俯き座っていた。

聞こえてくるのはカサカサと揺れる木々の音だけ。

いつも聞えている鳥達の鳴き声は今では聞えてこない、これから起こるであろう事を静かに見守っているのだろうか。

その静寂の時間を崩すかのように一体の魔物が現れた。

ミノタウロスだ。

ミノタウロスは強靱な肉体もさることながら嗅覚もとても優秀で、一人一人の匂いも判別する事が出来る。

あらかじめ目星をつけていた人間の女の匂いと違いない事を確認し、周囲に他の人間が居ない事も確認している。

あるのは人間の女が一人と大きなタルに入った酒、そして生きたまま縛られている猪。

ミノタウロスはニヤリと笑うと女の前に出る。

女は怯えきってしまったているのかミノタウロスの事を見ようともしない。

「オイ、才前、俺ノ、嫁」

「はい」

少女は震える声で返事をした。

その声はとても細く、ミノタウロスの耳でようやく聞き取れる程度であった。

「結婚、する。言葉、言え」

「……」

少女は返事をしない。

迷っているのか恐怖しているのか。

ボールに包まれて見えないその表情は何を浮かべているのか。

「言え」

その様子を見てミノタウロスは楽しんでいる。

弱者が苦しみ様というのは見ていても面白いものなのだ、しかも最終的には自分に屈しなければならぬと言う事が確定している。

「ど、どうぞ……」

少女の口が開かれる。

「頂いて」

そしてそれは服従を意味する言葉。

「くれやがれ、このブタやろうが！」

「ハ？」

少女はいつの間にか懷から青い宝石を取り出し、それをミノタウロスに向けていた。

「不意打ちのお、雷の矢お！」
サンダーボルト

突如として襲い掛かる雷。

それはミノタウロスの身体を貫き、肉を焼き、血液を止め、神経系を麻痺させる。

その時少女の隣においてあったタルの蓋が開き中から一人の少年が飛び出しミノタウロスの目の前に立つ。

「タケル！」

「来い！ ヤマトお！」

ミノタウロスの頭上に剣が現れ、それが頭を貫き、喉を突き破って顔面を切り裂く。

「人間と体の構造が殆ど同じと言う事は、脳みその位置や弱点、急所の位置も変わらないと言う事。神経に電気を流されて脳みそを真っ二つにされれば生きられないでしょ？」

少女は顔を隠していたベールを振り払う。

そこから現れたのは生贄として要求していた少女ではなく、ミノタウロスにとっては初めて見た顔の少女だった。

「アンタはその身体に進化した時点で私に負けてるのよ。この天才にね！」

そこにあつたのは先ほどのミノタウロスの笑みにも負けないほど邪悪な笑みだった。

ミノタウロスはその笑みを最後にこの世から去って行った。

「……あゝ、もう！ 成功して本当に良かったー！」

「お疲れさん」

ミノタウロスが死んだ事を確認するとジュリアはその場に尻餅をついた。

「臭いし怖いし厳ついし声デカイし臭いし、近くに一秒たりとも居たくなかったわ」

「あはは。無事で良かったよ」

武はブツブツとミノタウロスの悪口を呟いているジュリアに手を差し伸べる。

一人でドラゴンに立ち向かったり、ミノタウロスを倒す為に作戦を考え自分が一番危険な役割を演じたりしているが、やはりジュリアも自分と同じくらいの女の子なのだ。

「ま、私にかかればあんな奴真正面からでもこう『バキッ』っと…アレ？」

ジュリアのセリフに被っていたが確かに今バキッという音が聞えてきた。

見てみる。

そこにあっただのは青い宝石。

「わ、わ、わ……」

ジュリアが魔法を使ったびに掲げていた青い宝石である。

「割れてるー！？」

見事に真っ二つに割れていたがたしかにジュリアのモノであった。

ミノタウロスの丸焼き一人前？（後書き）

なぜこうなったかについては次回説明。

誤字や文法的におかしい点がありましたら教えてくださると嬉しいです。

書いてみて欲しいという短編やキャラクター等も受け付けております（メッセージ・感想どちらでもお知らせ下さい）。自分なりにアレンジしてみます。

ミノタウロスの倒し方

ミノタウロスの特徴。

嗅覚が野生動物並み。

危険感知も野生動物並み。

知能は基本的に馬鹿。

「これだけ見ると普通にやってたんじゃ確実に罠はばれるし入れ替わりもできない」

「待ち伏せは？」

「大人数で隠れれば匂いでばれる。見付かって真正面から戦えば負けるのは必至だし」

「じゃあ少人数でやるしかないのか」

「ええ。しかしそうなるとマリア……っだっけ？ 彼女の守りが薄くなる」

うーんと全員が頭を捻るがいい考えは全く浮かばない。

そこで、とジュリアが拳手をして全員の視線を集める。

「一つだけ手が有るのよ。彼女から目的をずらして、彼女が危険な目に合わなくても良い方法が」

「な、なんなんだそれは！？」

マリアの兄である青年が必至の形相でジュリアに詰め寄る。

「この方法にはマリアちゃんの協力が不可欠、しかも結構辛いかもしれないんだけど……どう？ やってみる？ 失敗したらどんな報復がこの村にあるか分からないわよ」

その言葉に村人全員が言葉を詰まらせた。

もし今から言う彼女の計画というモノが失敗すればそれはこの村の破滅も意味する。

そうなればこの村に住む女達は犯され、一生をミノタウロスの子を産む為だけの存在になるか、好みに合わなければ男達と一緒に食われ殺されるかの未来しかない。

僅かばかりの安寧を求めるか、それとも賭けに出てみるか。

二つに一つの大勝負だ、簡単には決められない。

人が良さそうな村長も悩んでいる。

「その方法というのは、どれ程の確率で成功するものなのですか？」

村長は緊張した面持ちでジュリアに問いかける。

「そうねえ、はっきり言えば8割方成功すると私は見ているわ。先手が打てて邪魔が居なければ勝てる自信はある。ようするにマリアちゃんをどうするかが問題なのよ」

「マリアから目的をずらすというのは」

「彼女の匂いをうつして、代役を立てるの。それが出来ればミノタウロスを騙せるわ。それに丁度良く彼女と体型が同じくらいだし」

「誰がでしょう？」

そう言うつと、ジュリアは瞬きを数回して何を言っているんだこの人という目で自信満々に胸を張りこう言った。

「私よ私。目の前にいるじゃない」

「え、胸が足りてな……」

武は即座に強制的に黙らさせられた。

後ろでのびている武は無視してジュリアはもう一度胸を張る。

その胸は明らかに平らで、村人が知っているマリアはそれよりも二段階くらい胸が大きかった。

しかしその事を指摘できるものはここにはいなかった。

「匂いをうつす方法はここじゃ言えないけど……どう？やってみる？」

村人は少しの間村人同士で話し合うとして時間をくれるように頼んだ。

生贄を捧げるのは翌日の正午、時間はあと30時間程度だ。

今から準備を始めなければ間に合わない、しょうがないので先に出来る事をしようとジュリアは武を引きずって村の外れにやってきた。

「タケル、のびてないでさっさと起きなさい」

「いつつー、事実を言っただけ」

「ああん？」

「すみませんでした」

武が起き上がるとジュリアはさっさと説明を始める。

「今回はちょっとアンタにも活躍してもらっわ」

「へ？ どうやって？」

「アンタ剣はどれくらい使える？」

武は剣道はやっていたがそれはスポーツのようなものであり、それで殺し合いを出来るかと言われれば答えはNoだ。

「今から鍛える事は出来ないし、しょうがないから卑怯な技を盛りだくさんで勝つわよ」

「なんだか嫌だなその言い方」
「はあ？ 何言ってるの？」

ジュリアは片手を振り上げ、そして壮絶な笑みを浮かべるところ
宣言した。

「勝てれば良いのよ、敵を殺せば良いのよ。それだけが私たちが
なすべき事なの」
「なんか悪役っぽいぞお前」

まあそれは良いとして、そう言っただけでジュリアは一本指を立てる。

「アンタの武器の説明はしたわね？」

「ああ、確か魔刻マクのことだろ？ 家を買えるって言ってた」

「庭付き一戸建てね？ その能力の中に呼び出して言うのがあつ
たの覚えてる？」

「ああー、たしか言ってたな。意味は分からなかったけど」

「簡単に説明すると、遠く離れた場所に置いてあってもそれを即座
に呼び出すことが出来るのよ。やってみて」

「やってみて……」

やってみてと言われて即座に出来るような事ではないような気がする。

「こう、剣の事をイメージしてみてよ。魔法で一番大切なのはイメ
ージする事なんだから」

「イメージねえ」

イメージ。

柄は確かこうで、これくらいの長さで、と武は自身の記憶を掘り

返しながら剣のイメージを作り上げていく。

確か、村長の家に持ち込んで壁に立てかけると床が抜けたり壁に輝が入る可能性があるから家の前に突き刺しておいたのだった。

魔刻^{マーク}が無ければどんな重さになっていたのだろうか。

「よし、来い！」

.....

.....

.....

.....

.....

何の変化もおきない。

「あ、あれ？ 来い！ 来いやあ！ 来いってば！ 来てください
お願いします！」

「うわ、カッコわる」

やれと言っていた人物がそれを言うのは何と酷いことか。

しかしそんな武の姿は周囲から見ればかなり情けないモノだった。

「どういう事？」

「んー、きつとアレね。貴方がちゃんとあの剣を自分のものと認識
していないせいね」

「はあ」

「何よその気の無い返事は」

「いや、そう言われても」

そんな事を言われて即座に呼び出すことができればさっきまでの苦勞は全く無かったと思う。

「んゝ、後はあの剣に銘があるとか？」

「名前か」

村長の家の前に赴き、じっくりと見てみる。

「あ、これがそれっぽくない？ 読めないけど」

どれどれと見てみるとそこには漢字で「大和」と書いてあった。
ヤマトである。

なんというかととても不吉な名前だ。

いや、船の名前ではなく国の名前だと考えよう、そうしよう。
素晴らしいじゃないか大和魂。

だが、武器を呼ぶたびに剣の名前を呼ぶって何の罰ゲーム？といった感じだが諦めるしかないのだろうか。

「そんな嫌な顔してないで、とりあえず呼んでみなさい」

「……ヤマトー」

突如目の前に現れ、地面にザクツと突き刺さる剣。
何故かジュリアのすぐ近くに突き刺さる。

「
……」

気まずい雰囲気が流れる。

武はジュリアの冷たい目から逃げるように視線を逸らす。

「ふーん、どうやら直接手に召喚するわけじゃないのね。それってどこまで自由が利くのかしら？」

笑顔で聞いてきているが何故だかぜんぜん安心できない。
それどころか寒気すらしてくる。

「じゃあ、やってみてくれるかしらタケル君。もしかしたら故意で私の目の前に落としたのかもしれないし？」
「はいっ！」

何事もチャレンジだ。

恥ずかしがるうがなんだろうがまずは一回召喚してみよう。
まずは最初に手を前に出し、そこに収まるように出してみる。

「ヤマト」と呼ぶとそれはピッタリと狙ったところに収まった。
続いて遠距離、と何度か繰り返していると大体の法則というのが分かってくる。

まず剣は自分の視界の中に無くていい。
つまり板をはさんだ向こう側に置いてあつたとしても呼び出すことが出来る。

これは、100mから200m離れていても呼ぶ事は出来た。
ただし出現位置は自分から半径約2mほどの場所にしか出す事が出来ない。

視界が遮られているところにも出すことが出来ない。
という以上の性質が合わさっている事が判明した。
すぐに報告する。

「分かったわ。じゃあ次の段階に移行しましょうか。村の人たちも

協力してくださるそうよ」

武が永遠と実験を繰り返している中、ジュリアは村人達の話合いの中に入って行き、結論を聞いてきていた。

どうやら村としてもこれからミノタウロスと付き合いしていくことは村の滅亡に繋がる可能性が大きいとして討伐する事に決定したそうだ。

「じゃあこれはいい」

「何だこれ」

渡されたのは桶が一個。

中にはアルコール臭のする液体とそこに浮かぶ布製の何か。

その布はどこか武にとって見覚えのあるものだった。

「お酒と、アンタの服」

「何してんの!？」

見覚えのあるどころか自分が昨日まで来ていた服だった。

今は村長の家で借りる事となったこちらの世界の服を着させてもらっている。

「良いじゃない。煤まみれで所々穴あいててボロボロだったんだからさ。その代わりにその服を報酬として貰うことになったわ」

急いで取り出すと、もう変色していて、匂いが染み付いているのがアルコールの強烈な匂いが漂ってくる。

「それとアンタはお酒に浸かってなさい。お酒の匂いを身体に染み付けて匂いを隠すのよ。特別匂いのきつい奴を頼んでおいたから…」

… ああー、頑張って」

呆然とする武に同情したのか少しだけ言葉を濁すジュリア。

「そっちはどうなんだよ、においうつすって奴」

「ん？ んー……頑張るって言ってたわ」

この時、武は分からなかった。

この後ジュリアがマリアという少女とナニをしていたかという事を。

だが翌日にアルコールの匂いにフラフラしながらも起きてくるとベツタリとジュリアに寄り添い頬を赤くして涙目になりながら「お姉さま」とジュリアを呼んでいるマリアを見て大体の事は察する事は出来た。

匂いをうつすという事はお互いの身体を擦り合わせ、お互いの匂いの元となる体液を（ここから先はご想像にお任せします）。

ギリギリの描写で済ませて置こうと思う。

武はその二人の仲睦まじい姿を横目にガンガンと痛みのする頭を手の平で叩きながら自分の待機場所である酒樽に入り込む。

この作戦が上手く成功する事を祈って。

「ああ、頭が痛い」

幕間

「あんたって弱いね」

サリからアイリに向かう道中に武がジュリアから言われた辛らつな一言である。

そもそも武はそういった事の必要な世界から来たわけではないので出来ないで当然なのだが、そんな事を言ってもしょうがない。

元々この世界には武の世界ではファンタジーなモノであった魔物と呼ばれるモンスターがそこら中を歩き回っている世界である、普通の一般人でも剣や棍棒を使ってどうにか自分の身だけは守ろうとするのである。

それなのに武にはそんな事が出来るはずもなく、突然現れた魔物に怪我を負わされてしまったのだ。

ジュリア曰く、その魔物はこちら辺では良く見かける俗に言うスライムのような最も弱い魔物だったらしく、少し剣が振るえれば無傷で倒せるようなものだったそうだ。

「そんな剣を持っても、剣の振り方も分からないなら宝の持ち腐れよ。とつとと私に渡しなさい」

「嫌だ」

しかしジュリアの言うとおりであった。

どれだけ剣が強かったとしても、それを使う人物が自分のような人物では意味が無い。

ミノタウロスを倒したのだって、自分で剣を振るったのではなく、剣を相手の真上に呼び出して動けないミノタウロス脳天から突き刺したに過ぎない。

「私の旅に付いて来るって言うならそのままだといつか必ず死ぬわよ？ それにアンタが弱いままだと私だって何時死ぬか分かったものじゃないし」

冒険というのは一人でも足を引っ張ってはいつか必ず死んでしまうほど危険なものなのだ。全員が協力し、助け合わなくてはならない。

そういった意味では複数人にいる安心感と言うモノもあるが、一人という安心感もあるのだ。

それは武にとっても同じで、平和な異世界から来たなどと言っても意味は無く、出来なければ死ぬだけなのである。

「しょうがないわね、次の町に着いてから私が少しだけ稽古をつけてあげるから待ってなさい」

「……！ ありがとう！」

「な、なによ。そんな大きな声で返事するんじゃない、ビックリするじゃない」

武とジュリアの旅路は賑やかに続いていく。

因みにアイリまでの道のりでその後も何匹も現れ、その度にジュリアに「弱い」「へたれ」「もう少ししっかりしろ」などといわれ続けるのだった。

幕間（後書き）

申し訳ないと思っている。

いま、リハビリの最中です（書き手的な意味で）

何だか妙な文章になるかもしれませんが、指摘のほどよろしく願います

お天気娘は森に行く？

アイリという町は城壁に囲まれた都市だった。

もし隣国と戦争になった場合に、この都市は最前線の都市として野戦の基点となるだろうと思われる為であった。

「おおー、でっけー」

その城壁に驚きを隠せない武は、そのまるで中世ヨーロッパのような風貌に思わず感嘆の声をあげた。

気分はまるで中世ヨーロッパへの時間跳躍旅行である。

宗教が怖い、ジュリアが結構怪しい自分を簡単に受け入れてくれたので怪しい行動をしなければ大丈夫だろう。

「驚いた？　ここがジルヴァート王国の対ガルディア魔法帝国最前線都市、アイリ。まあ今ではもう戦争も終って安定しているから軍人も少なくなっているし、ガルディアとの国交のために商人が良く出入りしているからその面影は余り感じられないけどね」

ガルディア魔法帝国というのは文字通り魔法の最前線を行く国家で、魔法の技術力では他の国よりも一歩進んだ国である。ジルヴァートの東に位置していて、数百年ほど昔に戦争をしていたらしい。今では関係は良好で、こうして交易が盛んに行われている。

「治安はかなり良いんだけど路地裏とかは注意しなさい、国交が良くなつたお陰で軍が少なくなつたけどその弊害で大規模な軍が置けないの。そのせいで表では平和だけど裏の方の取締りがし難くなってるんだって」

国境付近に軍を置くという事はそれだけで相手国に緊張感を与えてしまう。

しかし治安を守る為にはそれなりの戦力が必要。
そこら辺の事を考えて戦力というのは配置しなくてはならないのだ。

「こつちよ、付いてきて」

ジュリアはそう言うといきなり路地裏へと入って行つた。

「おい、路地裏には気を付けるんじゃないのか？」

「大丈夫よ、こつちは魔法関係の店が並んでるから少しでも粗相をすれば爆発するわ」

もちろん物理的にである。

魔法使いというのは孤独を好むのだが、その孤独を邪魔するものは一切の遠慮をしない。もし自分の店の前で喧嘩などしようものならば喧嘩両成敗の名の下に双方に魔法を食らわせる。そのためこんな所で喧嘩をしようなどというやからは存在しないのだ。

その事を訴えたとしても、魔法使いは国にかなり貢献している、その為に罪に問われたとしても無罪放免となるか、形だけの処罰となるかの二択である。

「こつちよ、私のアカデミー時代の同期の友人が店を経営してるの」

「へー、凄いな。同期って事はかなりわかいんだろ。それで店を経営してるなんて」

「親が首都でやってるんだって、そこから看板を貰ってきたとか。

年齢は14よ」

「はー14かー……14。へ？」

因みに武は高校2年の17歳、一つ下に妹がいる。
対してジュリア・マクベルンは14歳、店を経営している子も14歳。

「ん？　どうかした？」

どこか大人っぽく、自分よりも明らかに達観した考え方をしている少女が自分の妹よりも下だったのである。

しかもそんな少女に武はちよつといけない想像やらをしてしまった事も……。

「どうしたのよ、そんな暗いところでうずくまって、汚いじゃない」
「汚い、そうさ俺は汚れた人間だよ。ふふふふふふ」

プライドやら男としての尊厳やら社会的な地位やらを消し炭にするような事は忘れて武は立ち上がった。

今更同行する事も出来ないし、武が生きていた現代とはそもそも考え方が違うのだ。それに14で経営者という事はそれに相応しいほどの天才なのだろう。凡人な自分には関係の無い世界だ。

そう考えると少しだけ楽になれた気がした。

お天気娘は森に行く？

ジュリアは一軒の小屋の前で立ち止まった。

小屋の周囲は片付けられており、他の場所よりは清潔さが保たれているように見えた。というのもここまでの道が動物の糞やゴミが捨てられていて現代の衛生的な生活に慣れている武にとってみれば不衛生で立っているのも辛いほどのモノだったというだけで、ここも綺麗とは言い辛い。周りよりはまし程度である。そもそもそういった事に対する意識レベルの差なのだからこれはどうする事も出来ないのだろう。

ジュリアはその小屋の扉を二回ノックする、すると中から「はいはい」というまだ若い少女の声が聞こえてきた。

「どなた様？」

その扉からひょっこりと顔を出したのは茶色い髪のクリツとした目の特徴の少女であった。

ジュリアを綺麗や美人と表すとするこの少女は小動物のような可愛らしさが見て取れる、「どちら様？」という言葉と首をちょこんと傾げた様はまさしく森の中で出会ったリスなどの小動物をイメージさせた。

「ジュリアよ」

「ジュリア！ 久しぶりじゃない！」

少女はジュリアが名乗ると同時に不思議そうな顔が花の咲いたような笑顔に変わり、まるで突進するかのように抱きついた。ジュリアも慣れているのかそれを難なく受け止めると優しそうな笑みを浮かべる。

ジュリアが少女を下ろすと今度は武と視線が交わる、そして再び不思議そうな顔になったかと思うとすぐに何かに思い当たったのかニヤツとしたいやらしい顔になり。

「ジュリアの彼氏？」

と言った。

「な、なにを……！」

「違うから」

武は慌てて言い返そうとするがそれを遮るようにジュリアが平然としたまま否定する。

その事に少し落ち込む武と残念そうな少女にジュリアは大きなため息を吐いた。

「こいつはタケル、訳有って今は私と旅をしてるの」

「よろしく」

「よろしくタケルくん！ 私はアイラ、ジュリアの元恋人」

「……は？」

アイラはニヤニヤと笑いながら衝撃的な発言をする。固まる武、呆れた顔のジュリア。

武がジュリアの顔を見てみるとジュリアは諦めたような顔で一つ頷いた、どうやら本当のことらしい。

武も今までそれらしい発言や行動は見て来たがこうして直球で言われると思わず固まってしまった。

「余りタケルを苛めないでね、それでも冒険の相棒なんだから」

「あはは、分かった分かった」

でも、元恋人なんだから嫉妬位しても良いじゃない？ とアイラが言つとこの話は終わ리と言つかのようにジュリアは懷から青い寶石を取り出した。それはあのミノタウロスとの戦闘によつて割れてしまつた発動体の寶石。

「うわあ、派手に割れちゃつたね」

「周りの補強材が無い、剥き身の状態で魔法を行使したからよ。そのせいで発動体が私の魔力に耐え切れなかつたのね」

「さすが天才ね」

アイラにしてみればもう笑うしか無い出来事だつた。

この発動体というのは普通ならば魔物に殴られたとしても壊れる事は無いほどの頑丈さを誇つている、その周りを覆つている補強材と呼ばれるモノだつてそうだ、そうそう壊れる事は無い。もし、これを壊せるとすればそれは超重量級の魔物が踏むか、怪力の魔物の攻撃を直に受け止めるしかない。そなれば魔物の数はかなり絞られる。

「ドラゴン？」

「正解」

「また無茶をして」

「しょうがないじゃない」

「『サーラとの約束』だから？」

「さすが、よく分かつてるわね」

「当然よ」とアイラは笑つてゐるような悲しんでゐるような顔をしながら宝石のチェックをしていく。

「私は、『最強』で、『最高』にならなくちゃいけないのよ」

「……」

それがジュリアがした約束。

大切な、大切な妹としたたった一つの約束。

ジュリアとアイラの間に思い沈黙が訪れる。

アイラがジュリアと分かれた理由、それは彼女のその目標が余りにも高すぎて自分が付いて行けないと悟ってしまったから。そしてそれに伴うほど彼女の才能が余りにも高すぎたから。アイラは彼女のそばにいるのが怖くなり、苦痛になってしまったのだ。

「……終ったわ」

青い宝石から目を逸らし、アイラは紙に数字を書き込んでいく。そこに書かれた数字をジュリアに叩きつけて宣言する。

「1B^{フロンズ}たりともまけないから」

とても楽しそうな言葉と共に差し出された紙に書いてあった数字は、今のジュリアでは到底払えないようなモノだった。

お天気娘は森に行く？

「少して良いからまけて？ 半額くらいに」

「どんなに頑張ってもそれは無理だわー」

「昔のよしみでさ、友人価格ってやつで！」

「1Bたりとも安くする事なんてできないわー」

必死で頼み込むジュリアを横目にアイラは割れた発動体を集めて布で包んでいく、もちろん笑顔で。まるでジュリアが慌てているのを楽しむかのようにゆっくりと。

「って言うかどうしてこんなに高いのよ！ 前はもつと安かったじゃない」

ジュリアが始めて発動体を買ったときには今表示された金額よりも3割以上安かった、これでは友達割引とか言う以前にぼったくりである。

これではここに来た意味が無い、他の場所を買ったほうがかなり安く変えてしまうのだ。

彼女にこの事を言っても「べ、べつに少しでも安くしてもらおうと友達を利用した訳じゃないんだからね！ ちよつと会いたかっただけなんだからね！」と照れながら言う事間違い無しである。ツンデレ（？）である。

「実はさ……、この補強材って何が使われているか知ってる？」

補強材というのは発動体が直接魔力の影響を受けないようにすると同時に、術者の魔力を増強する役割も持っている。この補強材は霊樹と呼ばれる長い年月を経て大木に成長したもののほどその効果

が高く、それに応じて値段も高くなっていくのだ。

「実は元々このあたりは霊樹が取れる場所が数箇所存在していたのよ、だけど最近になってゴブリンが巣を作ったみたいで、木こりが森の中に入れないのよ」

「討伐隊は編成されないの？」

「軍は動けないから冒険者をつて事になってるんだけど、ゴブリンが住み着く前に遺跡が見付かってさ、そっちの探索用に人員が割かれちゃってるんだよね。学者とかの野営要因や護衛として」

「冒険者の数が激減しているわけだ」

「そう言う事、そのお陰で霊樹が値上がりしちゃってさ。もうこの価格じゃないとやっていけないのよ」

「まさかそんな事が同時に起こるなんて、偶然ね」

「偶然じゃないわ、必然よ」

「どうしてだ？ 魔物つてのは自然災害と同じようなモンなんだろう？」

「あら、タケル起きたの？」

武はいつのまにか復活したのか話に参加してくる。

よく考えてみれば彼女達の年齢は13、4だ、そんなに生々しい出来事が起こりえるはずが無い、そうに違いない。とりあえず村での出来事は忘れる事にした、マリアとは何も無かった。

「遺跡調査で大規模な調査団が組まれちゃったせいでその調査団が遺跡に向かうまでの道中に魔物狩りをしてたのよ。そうしたら魔物たちは逃げて来てしまったと言う訳」

魔物というのは野生の動物と殆ど同じで危険には凄く敏感だ、こいつった危険にはすぐに反応して別の住処に移動したということだろう。そして今回はその遺跡の周辺に生息していたゴブリンの集団

が霊樹のある場所に生息してしまったのだ。

「じゃあ自分で取りに行くのが一番早いわね」

「それなんだけど……」

通常冒険者というのはそういったものの採取というのも自分達で出来るように訓練されている。

魔物退治や護衛というのは余り無く、護衛は専属の冒険者が付いていたりもするために殆どの冒険者は危険地帯での素材採取をメインにしている人物が多いのだ。

「ゴブリンの大群に付属してホブゴブリンも確認されているのよ」

ゴブリンというのは亜人の一種で、独自の文化を持つ雑食の魔物だ。人間も食料の一つと考えているようで、たまに集団で村落を襲う時がある。

ホブゴブリンというのはゴブリンの上位種の事で、知能は低いが腕力や体力はミノタウロスに劣るが人間よりは圧倒的に高い。駆け出しの冒険者には辛いものがある。

「……因みにどれくらい確認されてる？」

「5匹まで確認されてる」

ゴブリンの集団にプラスしてホブゴブリン5匹、普通なら諦める。そこまで来ると安全のために冒険者を総動員しなくてはならないほどの数だ、しかし今はその冒険者が居ない。

「……急いでも仕方ないし遺跡の探索が終るまで待機するしかないか」

たしかに早いほうが良いのだが、ここで焦って死んでしまっても仕方が無い、ここは大人しく待っているのが良いだろう、と考えるジュリア。だがアイラはジュリアに顔を近付けるとニヤリと笑う。

「そんな貴方に良い情報が有るんですがどうですかあ？」

「アンタ、今とっても悪い顔してるわよ」

「うひひ」

しかし秘密の話というのは総じてとても美味しそうなもので、ジュリアがアイラが持ち出した話に乗るまでにそう時間は掛からなかった。

お天気娘は森に行く？（後書き）

そして武（主人公（予定））は空気になる

お天気娘は森に行く？

自然豊かな森の中、武はその空気にどこか懐かしさを感じていた。そうあのこの世界に来るきっかけとなった沖縄にある森である。

この空気はまるでそのような雰囲気があった。それは神聖さとも言うのだろうか、まるでそこだけが世界の動きから隔絶されているような、そんな感じである。

聞いた話によれば霊樹と言うモノが生えているところは聖域とされていて、一般人ならば入る事さえ憚られるのだそうだが、まるで空気に押し戻されるかのように。入れるのは長年霊樹から材料を採取する事を生業にしているような人物が。

「へー、綺麗な場所ね！ こういうところなら観光地にでもして金儲けの一つでもすればいいのに」

元からそういったことに無関心でそんな空気など微塵も感じない人物のどちらかである。

「ん？ 何よタケル、私に言いたい事でもあるの？」

「いいえ、なんでも」

ここで何も考えずに「感受性皆無だね！」とでも言えば恐らく魔法は飛んでこないがその手に持っている木刀が武の脳天を打ち抜くことだろう。

杖が使えないジュリアは剣を持っていこうとしたのだが所持金が杖を買う程度と生活費程度しか無く、しょうがないので自分で手ごろな大きさの木を持ってきてナイフで削りだしたのだった。

ちなみに腕前のほどは武が身を持って体験しており、自分が木刀の方が良いではないかと真面目に考えたほどだった。しかし残念な

がら武の剣は重すぎて武意外には使用不可能であった。

木刀で打ち合っているときにアイラに武の剣を見せたのだが、その時アイラは口からよだれを垂らさん勢いで剣に縋り付き、武にキラキラとした目を向けて「買った！」と言い放ち、何が何でも武から貰おうとしていたのだが、本人の名誉の為に控えておく。

「やーやーお二方、これから中に入っていくけど準備は大丈夫かな？」

「もちろん」

「大丈夫だ」

戦闘要員二人と案内一人の合計三人で霊樹があると言う聖域の一つの前に来ていた。

元々アイラは来るはずも無かったのだが、今回は場所が場所という事で同行する事になった。通常であれば戦闘要員二人で護衛など出来ない、しかし今回の場所はなんと未だに未発見とされている聖域なのだ。

「私が見つけたのはたまたま何だけどね、薬草を取りに来た時に迷っちゃって、気が付いたら聖域の中。でもその辺りで聖域が確認されたなんて報告は無かったはずだからこれは大発見な訳よ、んで今回の冒険で貴方達が私の護衛としてそこへ赴き、その証拠品として霊樹を持ち帰る。これなら完璧、しかもそこはゴブリンが確認されている場所から離れているから危険は無い」

そうジュリアに耳打ちしたアイラは生き生きとしていた。

つまり、アイラにとっては新たな聖域の発見者として有名になれば商売繁盛、俺たちは杖が手に入ってwin winの関係になれると言っわけだ。

「それじゃあレッツゴー！」

三人は森の中へ入っていった、入る直前にピリツとした何かを感じるが別段身体に異常は無い。

しかし空気は違った、外から見ていてもどこか近寄りがたい空気を醸し出していたのに、ここではそれがさらに強烈になっている。あまりにこの森は綺麗過ぎるのだ、自分がこの森に入る事でこの穢れの無い森を汚してしまうのではないかと思えてしまう。

「聖域にも魔物っているの？」

「いるわよ、むしろ多いわね」

聖域に魔物というのも何だか妙な話である、ゲームなどでは魔物というのは聖域からは逃げいくようなイメージがあるからだ。

「魔物って言っても人間が呼んでいるだけで、実際には人間みたいな大型動物も襲う肉食動物ってだけよ。むしろ魔物のほうが人間なんかよりも自然に近い物なのかもね」

「霊樹っていうのは長く生きた木だから、人間よりも魔物のほうを受け入れる。人間は汚れすぎなのだってどっかの学者が論文出したよね、教会から非難轟々だったらしいけど」

だからこそここに入るときに入り辛さを感じたのかと武は一人納得していた。

いつからか自然との対話を忘れ自らの住みやすさのみを追求してきた人間と、自然の中に生き自然の節理の中に住む動物達。どちらを自然が受け入れるかと言われれば動物達の方だろう。たとえ魔物と言われていようと魔物たちはただ必死に生きているだけなのだ。そう考えると自分がここにいるのはどこか場違いのように武は思えてきた、ここは人間の聖域ではなく、動物達の聖域なのかも

し
れ
な
い。
。

お天気娘は森に行く？（後書き）

さりげなくタイトル変更、本当は森というのは山の中にあってそこを登っていくという話だったんだけど、ちょっと変更して普通に森になりました。

誤字等ございましたらご一報お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8138t/>

ノーマルパーソン

2011年11月13日21時00分発行